「ネグレクト」の検証報告書である書籍を読んで

新聞の書評が目に留まり、第１１回小学館ノンフィクション大賞：「ネグレクト（育児放棄）－真奈ちゃんはなぜ死んだか－」を、読み始めると吸い込まれて一晩で読んだ。１０代で親になった若い夫婦が、我が子である姉弟の３才の姉だけをネグレクトで餓死させた事件の背景を、検証した報告書というべき本であった。

この本の凄いところは、著者のルポライターが、裁判の傍聴や収監中の若い両親に面接、文通等から、その生い立ち、ネグレクトで我が子を結果として死に至らしめざるを得なかった経過や様子を検証しているだけでなく、両親や子どもに係わった周りの大人（若い夫婦の両親、親戚、友人、近所の方、保健師、児童相談所、医師、等々）にも面接し、現代社会の病理とも云える背景にも迫ろうと、検証しているところである。

そして、その大人たちの検証から、係わり合うでろう関係機関・者（大人）への今後の提言として、関係機関・者の「すぐれたネットワークとは、まず情報を共有し、地位や立場とは関係なく、（担当者のケースに抱く）個人的で感覚的な不安や感想も話題にできるような、ざっくばらんな場であることがとても重要だ。（そのケースに）関わる周囲の人たちが、お互いの大変さや内面の揺らぎを、仲間として支え合うこと。」と、連携のあるべき姿にも触れている。これは、何もネグレクト等の虐待のケースだけでなく、障害児・者、高齢者に係わる関係機関・者への提言でもあろうと思う。ケース支援・対応に関係する福祉施策（機関）が多種、多様な現状からして、各関係機関が連携することが多くなるだけに、担当者一人、一人が肝に銘じることであろう。

また、著者は、この事件に出会う前から育児に戸惑う親たちのルポを続けているが、「隣は何をする人ぞ」の風潮の社会にあって、身近にこうした育児に戸惑い、大人にアドバイスを求めることすらできない心情の若夫婦がいたとしら、蟻地獄に落ち込まないように、若夫婦に声かけや行動が出来るのか？と、鋭く私たち大人、一人、一人に問いかけてくる。この事件のような予備軍の親は、身近に予想以上に多いことを警鐘している。

私は読み進む内に、「この世の中で誰も教えることのできないことは、人を愛するとはどういうことかということ。それは、人に愛されてこそ学ぶもの。」という言葉が、重く、また、なぜだか切なく、思い出された。

（2005 年 2 月 3 日　記）